

巻頭言

確かな学力

数学部会長 崎山 廣和

今日、日々変化する社会の中で、高校生を取り巻く環境も大きく変わってきております。しかも、学校では新学習指導要領や完全学校週5日制の実施とともに、授業時数の減少や教育内容の削減により学力低下に対する懸念が高まり、「確かな学力」の向上が叫ばれるようになって久しいところです。

実際、生徒たちの学力には低下傾向が見られ、学業や職業に対して無気力な生徒たちも増えています。規範意識や体力・気力にも課題が見受けられます。こうした状況を踏まえ、21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るためには、私たち教師の指導力の向上、そして生徒の実態に即した教育課程の展開がぜひとも必要であるといえます。学習指導要領の目標である、基礎・基本の確実な定着と「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力など」を含めた幅広い学力の育成により、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育むという理念に誤りはありません。ただ、そのねらいが十分達成されているか、必要な手立てが十分講じられているかという点では、若干の課題があると思われます。付け加えて、中学校から移行された内容については、いずれも低学年で全員に定着させたい内容であります。それについては、私たちが中学校の実践に学び、中学校までの学習内容や定着の程度をきちんと理解し、高校用にアレンジして指導に当たらなければなりません。さらに、中学での選択教科の導入により、今まで以上に高校に入学してくる生徒たちの学習歴や習熟の程度が多様化してきています。習熟度別授業の進め方や、学習指導要領を超えた内容の取り扱いなども含めて、中学校の先生方との密接な連携のもとに指導に当たることが大切であります。

また、指導と評価の一体化とは、評価を指導の成果を見るためのものとして位置付け、適切に評価を行い、その結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという一連の活動の繰り返しを指しています。そのためには各学校において、プラン・ドゥ・チェック・アクションの循環による、指導と評価が一体となった授業改善システムを機能させることが大切です。そして、「知識・理解」を中心とした「チョーク&トーク」型授業から、「関心・意欲・態度」といった評価の観点を大切にした授業への移行を心掛けなければなりません。高等学校の場合は、多くの学習内容を履修しなければなりませんので、難しい点多々ありますが、「例題を解いて見せ、演習させる」という昔ながらの授業展開ではなく、考え活動する時間の中で、自ら問題点や解法に気づき、さらに達成感の持てる授業が期待されているところであります。

これからの学校教育においては、「確かな学力」を育てる学習指導や評価の在り方、さらに一歩進んで個に応じた指導や生徒の意欲を高める授業実践などの研究が、今まで以上に重要になる時代であります。そのために私たちは、様々な機会を通して、時代の進展、そして、生徒の実態に即応した数学教育の充実に資するよう努めて行かなければならないと考えます。そのために、この部会誌「 $\alpha-\omega$ 」が、各学校での授業充実の一助になることを願います。